ほんの少しの気遣い
松江市立宍道中学校　二年　　角あいか

　皆さんは、障がい者について何か知っていますか。「障がい者」と聞くと、無意識に特別扱いしたり、「かわいそう」と思ったりする人もいるのではないでしょうか。耳が聞こえないから、うまく思いがつたえられないからと、そう考えるのかもしれません。でも、皆さん考えてみてください。自分が望んでもいないのに特別扱いされて、「かわいそう」と言われたら、どうでしょう。私は嫌です。私の小学校の友達や、親戚のいとこは、養護学校や特別支援学級で学んでいます。今からお話するのは、もともと耳が聞こえなくて、今は養護学校に通っている私の友達のＡさんのことです。Ａさんのことと、Ａさんの家族の本当の思いそして、よく一緒にいた私の思いを話します。
　Ａさんは、小学校のときに辛かったことがあるそうです。それは、クラスの人の声や私語が大きいことだそうです。Ａさんは、普段は「おひさま」というクラスにいて、ときどき私たちと一緒に勉強していました。Ａさんは、一緒に勉強することがすごく楽しみで、いつもニコニコしていました。そのため、当時の私は気づいていませんでしたが、その後、文通をしているときに、Ａさんが当時の本当の思いを伝えてくれました。
「本当は、うるさくて静かにしてほしかったけど、クラスの雰囲気を悪くしたくないから黙ってたんだ。」
と。それを聞いて私は、「なんでもっと早く気づいてあげられなかったんだろう。自分が気づいて聞いてあげて、みんなに注意すれば、こんな思いをさせなくて済んだのに」と、すごく後悔しました。そして、すごく鈍感だった自分に、自分で腹を立てました。
　でも、Ａさんは、普段の生活で、嫌な思いだけをしたわけではなかったのです。
　私は、中耳炎になることがとても多くて、耳がよくなかったので、手話ができました。だから、Ａさんと手話で話したり、わからない手話を教えてもらったりしていました。そういったこともあり、私ともう一人の友達が、Ａさんとすごく仲が良かったため、文通をしている中で
「一緒にいてくれて本当にうれしかった」
と言ってくれました。そのおかげで、「Ａさんの苦しみに気づいてあげられなかった」と自分を責めていた私は、心が軽くなりました。
　私は、Ａさんの気持ちだけでなく、Ａさんのお母さんやお父さんの気持ちも聞いたことがあります。お母さんやお父さんは、
「生まれてきてくれて、本当にうれしかった。でも、耳が聞こえなかったから、すごく大変だった。」
とおっしゃっていました。そして、私に対しては
「一緒にいてくれてありがとう。今年もよろしくね。」
と言ってくださった記憶があります。そのとき、私にとっては当たり前に仲良くしているこ

とが、Ａさんやそのご家族の方の支えになっていると分かって、嬉しかったです。

　このように、障がいのある人やその家族は、いつも私たちが当たり前にやっていることが、負担になったり、支えになったりします。私はＡさんと文通をしていて、考えたことがあります。それは、「障がいのある人に対して、みんなと同じように接するけれど、少しだけ、ほんの少しだけ、気遣って接しよう。」ということです。それは、特別扱いをするのではありません。少しだけ声の音量を小さくしたり、少しだけゆっくりしゃべったりするということです。これは、障がいのある人に対してだけでなく、誰に対しても言えることだと思います。私も、「この人は強く言うと怖がってしまうから、優しく言おう」など、人と接する中で、少しだけ気遣いをするようにしています。いろいろな人がいるこの社会で、みんながお互いに少しの気遣いをすることが、誰かの安心につながるのではないでしょうか。